

マウイの光彩

Follow in the footsteps of Georgia O'Keeffe

堀 雅子(編集部)=文 柳川詩乃=撮影
Text by AGORA Photo by Shino Yanagawa

ここは別世界。

時間の流れがほかとは違う。
この島に来られて本当によかった。

(ジョージア・オキーフの手紙より)



このすばらしい溪谷を三日間
描き続けています。
切り立った緑の山と滝は、
あまりにも美しい*。

ジョージア・オキーフ

Georgia O'Keeffe [1887-1986]

20世紀のアメリカを代表する画家。ウィスコンシン州の農家に生まれ、シカゴ、ニューヨークで美術を学ぶ。花をクローズアップした抽象画で注目を集め、その後も花、動物の骨、ニューメキシコの風景などをモチーフに描き続けた。写真家アルフレッド・スティーグリッツの伴侶としても知られる。

鋭

く切り立った険しい山容とはうらはらに、イアオの山肌はなめらかなビロードを纏ったようで、ときに人の肌をも思わせる柔らかさがあつた。山頂には厚い雲がたれ込めていたけれど、連なる稜線の先に時折、朝のまばゆい光をうけて白く輝く海が見えた。

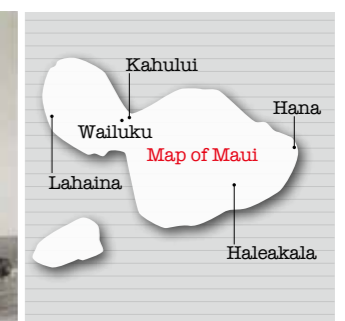
ある芸術家が描いた風景を探しに、マウイ島に来ている。その人の名はジョージア・オキーフ。抽象とも具象ともとれる美しい花、広漠としたニューメキシコの風景、宙に浮かぶ動物の頭蓋骨などの作

品で名声を得たアメリカ人女性画家だ。彼女がハワイを訪れ、二〇点ほどの絵を描いていたことはほとんど知られていないし、彼女の伝記をひもといてみても、ハワイについて触れられた箇所はほんの数ページでしかない。それでもオキーフのハワイ行きに興味を持ったのは、旅先から夫に宛てて書かれた二三通もの手紙に、ハワイ、とりわけマウイへの感嘆がたっぷりと綴られていたからだ。その文章から鮮やかに立ち上がってくるマウイの情景、オキーフを虜にした風と光と雨を、この目で見て、

感じてみたいと思った。

マウイ島はハワイ諸島のなかで二番目に大きな島だ。地形と気候は変化に富み、島をぐるりと一周してみると、海、山、平原、森、浜辺、断崖……地球のすべてがここにあり、るように思える。かつてオキーフが、そのすばらしさを書き送った美しい谷イアオへの入口までは、官庁街であるワイルクの古い街並みから車で一〇分ほどだった。緑濃い溪谷に立ち、たっぷりと湿気を含んだ空気を頬に感じるところから、オキーフのマウイを辿り始めよう。

1.マウイ島ハナの海岸に立つジョージア・オキーフ。Harold Stein, Georgia O'Keeffe in Hawaii, 1939. Alfred Stieglitz/Georgia O'Keeffe Archive, Yale Collection of American Literature, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University. 2.オキーフが描いたイアオ溪谷。Waterfall-End of Road-'Iao Valley, 1939 Purchase, Allerton, Prisanlee and General Acquisition Funds and with a gift from The Honolulu Advertiser, 1989 (5808.1) ©Honolulu Academy of Arts





オキーフ自らハンドルを握り、マウイ島を探索した。

オ

キーフがハワイを旅したのは、ドール社(当時)はハワイアン・パイナップル・カンパニー)の招待によるものだった。ドール社はその頃、広告用の作品を幾人かの気鋭の芸術家に依頼していたのだ。一九三九年一月三〇日、オキーフはニューヨークを発ち、サンフランシスコから船でハワイに向かった。ホノルルに着いたのは、実に九日後のことだった。ハイビスカス、プルメリア、ヘリコニア……生まれて初めて見る南国の花々の色とかたちに、彼女がたちまち魅せられたことは想像に難くない。

オキーフははじめの数週間をホノルルやカウアイ島で過ごし、南国の植物や釣り針などを描いた。知人のすすめでマウイ島に渡ったのは三月一〇日のこと。まずは東海岸沿いのハナの集落に一〇日間ほど滞在し、その後、島のほぼ反対側のワイルクに拠点を移した。ワイルクのオールドタウンに、かつてオキーフが泊まったマウイ・グランド・ホテルの痕跡を探してみなければ、残念ながら今その場所には、殺風景なガソリンスタンドが立つのみだった。

振りかえると、イアオの山がこちらをじっと見つめるかのよう

遠からず近からずの距離を保ち、そこにあった。イアオ渓谷は、カメハメハ大王に攻め込まれたマウイ首長の最後の砦であり、ハワイの王族が埋葬されているとも伝わる聖なる土地だ。その神秘性と存在感だけは、オキーフがここにいた頃と、ほとんど変わっていないのだろう。

さて、肝心の広告用の作品はどういうと、ホノルル滞在中、オキーフは偶然、広大なパイナップル畑を見つけた。

「見たす限り鋭く銀色に輝き、遠くに見えるでこぼこの美しい山並みで、何マイルにもわたって続いていくのです。そのあまりにも美しいに私は愕然としてしまいました」(*)

畑の近くに留まってパイナップルを描きたいとオキーフはドール社に申し出るが、労働者の村に彼女を住まわせるわけにはいかない

と、要求は却下される。憤慨した彼女は、およそ三カ月にわたるハワイ滞在中に、一切パイナップルを描くことはなかった。後日、ニューヨークに戻ったオキーフの元にドール社がパイナップルの株を贈り、パイナップルの絵を再び依頼する。空輸されてきた南国の果実の造形の見事に打たれ、オキーフは絵筆をとる。

こうしてドール社の元には、シルバークリーンの鋭い葉の中に小さな実をつけたパイナップルと、海を背景にした深紅のジンジャーの花、二つの作品が寄贈されることとなった。

マウイ島ハレアカラの山裾にも一軒のパイナップル農園がある。海を望む緩やかな傾斜地に畑が広がり、その乾いた茂みの上を強い風が吹きわたる。目が馴れてくると、夥しい数のパイナップルが茂みの間にびよこびよこ実っているのが見えてきた。おそろしくオキーフが魅了されたのも、こんな風景だったのだろう。マウイの日差しは強く、出会う人々はこんがりといひ色をしていった。同時にそのまばゆい光は、照らすものを柔らかな色に見せる、不思議な力も持っていたように思う。

1.2.ハレアカラ山麓の赤土で育つ「マウイ・ゴールド」はマウイ島が誇る銘柄。畑で切り分けてもらう果実は格別の味わい。3.オキーフをマウイで案内したパトリシア・ジェニングスの著書、『Georgia O'Keeffe's Hawai'i』©2011 by Koa Books



ハレアカラの麓、マカワオに広がるパイナップル畑。

